

鼎、叶えて。

—Doll in Our HOME 3—

ぶぶぶぶぶぶ・くすこ

(三朗佐)

鼎、叶えて。

—Doll in Our HOME 3—

ぶぶぶらり・くすり

(三朗佐)

よくよく観ていて思うのだけど本当にボクの保護者達と言うのはお茶の類が好きらしい。好きのレベルとか種類に世間一般との違いがあるのは折に触れ明白に判るけど。

で、一般的に夫婦と呼ばれる人達なら片方が座りっ放しでもう片方がお茶を淹れたりお菓子を準備したり、そして只座っている方はお茶が美味しいとも何も言わずズルズル飲んでるらしいと、テレビの中の光景からボクは学習した。

でもうちの保護者達は全然違う。だってこの人達には共有のお茶なんて無いんだから。

例えばある休日にリビングで三人だらだら座ってたとする。そしたら先ず真つ先にその空気を破るのが保護者その一・しっかり体育会系の雰囲気をもとった斉藤至。何かを発言するんじゃないくて彼は先ず台所まで歩いて食器棚に向き合い、彼の拳骨より小さな蛍焼の工夫急須とお猪口よりも華奢な蛍焼の茶杯を二つ取り出す。そしてポットからこれまた蛍焼の井に湯を注いで放置し、その間に樺細工の茶筒から煎茶をやや多めに急須に仕込み、井のお湯に氷を一かけ放り込んでよく冷めたと言う頃合いでそれを急須に注ぐ。その間保護者その二は只座っているだけ。

え？どうせこのまま二人分のお茶を淹れるんだらうって？

淹れる訳だけど、お茶を獲得する人が違うんだな。至が出した茶杯は至とボクの為のものだから。ボクは物理的に飲めないから良いよと言った事もあるけど、雰囲気は楽しめるだろ？とこの保護者殿は主張して以後押し問答もなんだから、と今日に至っている。

対照的なのは保護者その二・長身の文系美少年の成長後と言う感じの佐伯渉。彼が用いるのは専らティーバッグだ。彼専用の大振りな蓋茶杯は常に彼の手の届く範囲のテーブルの何処かにあつて、彼は手探りでそれを引っ掴んで煎餅の缶に突っ込んであるティーバッグを一つ抜き取って放り込み熱湯をざっくり注ぐ。そしてじっくり抽出した後に最初のものの半分の大さの蓋杯に使用済みのティーバッグを熱湯と共に淹れ、それをボクに寄越すのだ。無論ボクは渉にも一言言った事があるが：返事の代わりに有無を言わさぬ微笑が返ってきたのでそれ以上言及しない事にした。触らぬ神に祟りなし、ってそう言う状況だったと思う。

で、ボクの為に寄越されたお茶はその後何処へ行くのかと言うと、至のお茶は渉の許へ、渉のお茶は至の許へ行くのが定例になつている。二人とも『肖(ボクの事ね)のおさがりだから』なんて言ってるけど……うーん、それもなんか複雑な気分だ。じつち

やんはボクをそう言う風に送り出しはしなかった筈なんだけど。ボクつてさ、一介の球体関節人形なんだし。

ボクと先に出会って、じつちゃんの所からこの家に連れてきたのは渉の方。でも最初渉はじつちゃんの所に通うつもりでいたらしい。ま、一緒に暮らし始めて理由はよく判ったけどね。渉独りだったらこの家はお部屋じゃなくて汚部屋になっていたと思う。渉による生活配置って衛生的には多分問題は無いんだけど、モノが理路整然と並んでないんだね。渉にとって心地好いと言う事が優先されているから。この家の生活環境が男だらけの割にきちんと保たれているのははつきり言って至の存在が大きい。秋物にはまだ早いと言って着せて貰ったこのやや厚手のサマーセーターも実は至が指編みで拵えたものだったりする。うちの保護者達はなんか妙な部分で色々設定が入れ違っている様だ。

閑話休題。まあ渉がじつちゃんの所に通う事を選択したとしても難関が一つあったんだよね。それは渉が案内システムに手取り足取りされた状況でさえ道に迷う程度の方向音痴だった事。実はボクは既にその巻き添えを体感してしまっている。そう、じつちゃんの家からこの家に来る道中で。

まさかなんて反論は頼むからしないでね。体感したボクが一番信じられないんだから。幾ら慣れていない道筋が混じったからと言つても流石に近所に来たなら迷わないと思うよ、ボクだつて。でも渉は盛大に迷った。じつちゃんの家の近所ではなく、この家の近所で。道を訊かれた(恐らく渉とは相当お馴染みさんであろう)お巡りさんが苦笑を抑える為にボク達とお茶を飲んでそれからこの家に案内してくれたのも多分良い思い出だ、と思いたい。思わないと余りに恥ずかしい。

そのお巡りさんとボクも今じゃ顔馴染みになってる。実際に会える機会って年に数回なんだけど、変わりない？って訊いてくれるもの。変わりないのが当たり前じゃん。ボク人形なんだし。と、ツツコンでも藤山さん(お巡りさんの事ね)に聞こえてないんだけどさ。

うん。球体関節人形であるボクが普通に会話出来る人間は実際限られてる。しっかり確認出来る所でじつちゃんと渉と至、この三人だけだ。まあ三人居ると言う時点でも奇跡なんだろうな。他ならぬボクもじつちゃんだけがそうだろうと思ってたから。イタリアの操り人形の様にはボクが人間に変わらない限りね。

この家は実際ボクにとって居心地が良い。保護者達との相性

も含めてかなり良い条件が揃っていると思う。たまに、極々た
まに涉のずぼらさが気になる事はあるけどさ。それをさりげ
なくフオローしている至のまめさが又何と云うか…恋人のそれ
と云うよりも世間で云うお母さんのそれみたいで複雑な気持
ちになる。

良いんだけどね、家族なんだし。だから色々好きに言い合え
る部分もあるし。でもその空気を作る為にボクに出来たって事
は多分殆ど無い。その努力をしたのはやっぱりこの保護者達だ。
その一点は無条件に尊敬する。

肖を休ませる体制を整えて至は茶の間に戻った。休ませる
と言つても座っている彼に絹のケットをかけ、臉を閉じさせると
言う簡単な作業だ。多分省いても良い作業なのかも知れない
が、至は毎日のリズムの様にそれをさりげなくやっている。《寝
る子は育つしな》とか何とか莫迦を言いながら。

いつもなら一人で茶を飲んで、それで自室に引つ込むと言
事になるのだが今日は先客がいた。

「珍しいな」

「ん、ちよつとね、うだうだしてる」

「そか」

そして感じる軽い違和感。

「あ、香焚いてるんだ？」

「うん。厭？」

「この薫りなら大歓迎。……んー……」

「ああ、覚えある？」

「前にも薫りを聞いた事あるよな？」

「伯父さんの寺の傍でね」

沈香をもう少し華やかにした様な落ち着く薫りの中、二人
は暫し無言を楽しんでいた。

「あー、さあ」

「ん？」

「要るんなら至の分も少し分けて貰つておこうか？祖母ちや
んが作ってる奴だから」

「香も良いんだけどさ。匂い袋はあるの？」

「うん、同じ薫りの奴」

「そっちの方が良いな」

そう言えば、と涉が呟いて立ち上がり、自分の筆筒を探つて
戻ってくる。そして、至の掌に、ころん。

「こんな感じだけど、良い？」

「へえ、良い感じじゃん」

かなり小振りなお手玉型の、落ち着いた色合いの匂い袋。至の掌で暖められて熟れた感じの薫りが静かに昇り出す。

「この型で良かったら祖母ちゃんに頼んどく。そろそろ補充したかったし」

「うん。色は有り合わせで良いから」

「じゃ、至の好み伝えて見繕って貰っとく」

「……袋から造ってる訳？」

「祖母ちゃんの趣味だし。それに祖母ちゃんからも前々から言われててさ」

「なんて？」

「いっちゃんに似合いの古い錦を見つけたんだけど、数奇屋袋なんて持ちたがらないかねえ、ってさ」

「声色までは良いつつうの！はあ……あの祖母ちゃんがねえ」

「至も孫の心算なんだってさ。甘えとけば？」

「良いのかな？」

「良いんだろ、多分」

薫りでいつも以上に寛いだのか、渉は床に座っていた至にそつと凭れかかる。滅多に無い椿事だ。

「今だから言うんだけどさ」

問わず語りと領きの気配。

「至への気持ちを最初に相談した相手って、祖母ちゃんなんだよな」

凭れかかって、目は半開き。ゆつくりと自分の中を探る様に話す渉の声。

「自覚してしまった時、最初は誰にも話さないでおうと思つた。自分でも認めたい様な認めたくない様な変な気分だったし」

体伝いに響く振動を、至はただ受け止める。

「そう言う時に、祖母ちゃんに茶を勧められてさ。祖母ちゃんったら、相手構わず濡れ煎餅とべったら漬け出すんだよ？でも、なんも聞かない。ただ二人で茶をゆつくり飲んでただけ」

苦い回想の筈だろうに、楽しそうな口調。

「そしたらね、祖母ちゃんが匂い袋を一つくれたの」

返事の代わりに至はさつき受け取った匂い袋を掌に乗せてやる。

「あんたは将文に良く似とるなあ、って」

「まさふみ……さんって？」

「ああ、お寺の伯父さんの俗名。今じゃ身内でも殆ど呼ばないけど」

「ふうん」

「伯父さんにも若い頃、彼が居たそうでね。相思相愛で公認にまで行ったらしいんだ」

「え？だって今独り身…」

「死別したって祖母ちゃんから聞いた。それもあって仏門に入る踏ん切りをつけたんだって」

「そうだったんか」

「それ聞いたら、じわつときちやつてさ。で、祖母ちゃんにカミングアウト。付き合い始めた時も、最初の報告は祖母ちゃんに」

「……捌けた祖母ちゃんだな」

「衆道とかそう言う本をよく読んでた人だったから」

背中越しの気配をまだまだ感じておこう、と至は一人合点する。

「なんだったら、今度祖母ちゃんの所に一緒する？」

「ああ、一緒に茶を飲みに」

「…と、言う訳で君もここに居る訳。了解？」

ツッコミ無用と貼り付けた渉の笑顔に対して何か言えたらボクは絶対自力で動ける様になっていると思う。

お彼岸に良い年の男二人が連れ立って歩いている光景と言

うのは多分何気ないものだと思う。でもその内一人が球体関節人形をおんぶしてる光景って…うん。どうツッコんで良いか判らないから気にしないで置こう。

「肖」

『何？』

「お前、何気に重い？」

『な！』

何言ってるんだよとボクがツッコむ前に渉がさりげなく一言。

「至、お前さ、最近夜の運動、かなり上手く手を抜いてるよな？」

ボク、生まれて三年しか経ってないから大人の会話ワカンナイ。聞き耳を立てている人も居ない様だから良いけどさ。

「ほれ」

ボク達より七歩前に行った渉が背中を向けたまま少し屈んで後ろ手で手招きする。

「んな、良いって」

「良かないよ、ズルだし」

「はえ？」

「肖の保護者はいつちゃんだけじゃないんだからな？ここまでずつといつちゃんだけ肖をおんぶしてたし」

屋外でいきなり変わった呼び名はかなりの爆弾だったらしい。至の耳から首筋はボクから視て判る程真っ赤になつてゐる。

「……頼む」

「ん」

断言して良いと思う。ボクがこの場に居なければ至自身が涉におんぶされたかつたんだろうな、と。身長差があるとは言え体重の問題があるから三メートル進めれば良い程度かも知れないけど。

「よう来たね。あんたが肖かえ？」

あー、紛れもなくこの人は涉の祖母ちゃんだと思ふ。ただ涉と違うのは微笑の温度だ。この祖母ちゃんの微笑は一瞬でも氷点下になる事なんてないんだろうな、と思ふ。

「いつちゃんもよう来たね。少し痩せちゃせんか？」

「ああ、気にしないで。こいつ、肉が移動しただけだから」

至の苦笑いに祖母ちゃんの訳知り笑み。まあ、涉の地は祖母ちゃんも承知の上か。

「将文も来とるでの。一緒に茶でも飲みやい」

「伯父さんが？なして？」

「別にどうもせん。暇潰しだわ」

前言撤回。微笑は氷点下になってないけど涉の舌の鋭さは絶対この祖母ちゃんからの遺伝だ。

「じゃ、わーちゃんはそっち行けば？肖と俺は祖母ちゃんと茶、飲んでるし」

「一緒に良いじゃん」

「いや、匂い袋の事とかもあるし、な」

「ふうん？」

そっか、発動しちゃったんだ。至の人見知り。ガタイの割に至つて繊細だから多分色々緊張してるんだね。ま、ボクも安心できる人が多い方が良いし。

「祖母ちゃん、寛若さん、どこ？」

「裏の藤棚の下で野点しとるで、行つて来やい」

「あいよ」

楓沙寧山鬢常寺住職・佐伯寛若は海老茶色の作務衣姿で静かに茶を飲んでいた。卓の向かい席が空いていたので涉が会釈して座ると、会釈の気配と共に暫くして茶が差し出された。

無言のままに一服。飲み終えて息を吐き、暫くして更に一服。茶を飲む為に小半時費やし、それで良いかと涉が腰を浮かしかけた時、不意に会話が始まった。

「涉よ」

「うん？」

「今日は、家族連れか？」

「そう、顔見せにね」

「そりゃ、良い事だな」

「寛若さんは、なして？」

「一言お前さんにきちんと伝えねば、と気掛かりでな。そしてたら上手い具合にこうなった」

「何をよ」

寛若は、涉の顔をしげしげと視て告げる。

「相方さんの件を最初に祖母ちゃんに相談したの、それで正解だから」

「そう、なの？」

「あの頃のわ…オレには、多分冷静な答えは出せなかったらうしな」

寛若の眼差しが少しふてふてしい感じを帯びる。将文だった頃に少し戻って。

「確かに住職を任せて貰える程度には精進してたわさ。でも、それで全部を抑え切れた訳じゃない。無理矢理抑え込むのと納得して飲み込むのとは、訳が違うやね」

口調は荒っぽい。でも、眼差しはふてふてしいながらも限りなく優しい。

「納得して一人になって、それで相手がまだ何処かに居てくれたんだったら、良かったんだけどな」

「あ…ごめん」

「謝るな。こっちの問題だ」

「でも」

「二人寝がしんどいと言うのが一寸続いたってだけだ。まあ、それはそれとして、な」

茶碗の底に残った冷え切った茶をぐっと飲み干して、勢いで言う。

「まだ毛も生え揃って無い様な甥っ子の片想いの相手が遊びでつるんでる同級生だと知った時は複雑な気分になったぞ。無意味な責任感こそなかったが」

「だね。僕も祖母ちゃんに相談するまで伯父さんがこっちの人とは思ってなかった」

「隠してなかったけどな。ま、下品にしてなかったからそれで周りの受けが良かったと言うのはある。それにお前が生まれる前に剃髪してたし」

「そっか」

「そう言う意味でも複雑だったな」

「そう？まあ、そっか」

「そうだよ。…まあ、それは知識を得る環境の違いもあるか。オレ等の頃は雑誌しかなかったし。それも扱いのある本屋から探してな」

「僕はネットから自分がそうかも、って知識得たからその点は楽だったのかな。ただ、思い込みはしない様にしたけど」

「オレは…思い込まないと多分無理だったかもな。そうしないと自分の気持ちさえも受け入れられなかった。それで少し遠回りしたってのはある」

「男同士だから？」

「じゃ、ないな。むしろそう思えてたらあっさり既成事実作ってたと思う。でもそれも多分、後から言い訳だったって自分を責めるネタになるんだろうな」

もう一度しげしげと、渉の顔を見て将文、いや寛若は告げる。

「良い恋をして好い男になったな。相方、大事にせねばな」

「有難う」

寛若の目尻に光るものに、渉は気付かぬ振りをして居た。遅ればせながらにでも祝福してくれた伯父の優しさへの返礼とし

て。

ゆつくりと、ゆつくりと、パートナーとしての時間と家族としての時間を重ねながらここまで来た、と渉は改めて噛み締める。

家族達と完全に同じ気持ちになるのは難しいとしてもせめてずっと同じ方向を見て笑い合いたい、と誰にともなく祈ってしまう。

ふと母屋を見遣ると縁側に居た至と目があった。至の唇の動きを読んで苦笑しつつ、一緒に日向ぼっこをする為に渉は駆け寄ってゆく。

「了」

【電子書籍化にあたり本文を文字校正も兼ねて再入力】

奥付

後書き

コミックシティ参加の皆様方には恐らくサークル参加者として初のお目見えになるうかと思われます。普段はインターネットの一隅で由無し事を綴っております当方、ぶどううり・くすこと申します。

この連作短編集「Doll in Our HOME」は元々長編を成立させる為の草稿でしたが諸事情により宙に浮く形になっておりました。それをこうして無償頒布の連続短編集に仕立て上げ皆様に供する次第。この本で第三編と相成ります。

それでは連作終了まで後一作、ご縁が出来ましたらよろしくお付き合い下さいませ。御懐を煩わせぬ様最後まで無償頒布は続けます故。

「鼎、叶えて。」

— Doll in Our HOME 3 —

【二〇一〇年七月一七日脱稿】

◆◆無償頒布◆◆

著者・発行者：ぶどううり・くすこ【三朗佐】

発行日：二〇一〇年八月二二日

WebSite <http://xqo.blog.shinobi.jp/>

E-mail xqo@desu.ne.jp

© 三朗佐 2010

印刷：福井タイプ印刷株式会社

<http://pageprint.jp/>

鼎、叶えて。—Doll in Our HOME3—

<http://p.booklog.jp/book/71171>

電子書籍版：2013.5.9発行

著者：ぶどううり・くすこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/xqo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71171>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71171>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ